

氏名	まつもとじゅんこ 松本淳子
学位の種類	博士(文学)
学位記番号	文博第203号
学位授与の日付	平成14年3月25日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
研究科・専攻	文学研究科行動文化学専攻
学位論文題目	気分と音楽の感情的性格に関する実証的研究

論文調査委員 (主査) 教授 藤田和生 教授 苧阪直行 助教授 板倉昭二

論文内容の要旨

人は悲しい時に悲しい音楽を聴くことが経験的にある。その際に、音楽は気分にとどのような影響を与えているのだろうか。また、気分が異なると、音楽の感情的性格の主観的評価も異なるのだろうか。本論文は、日常的な音楽聴取行動から、気分と音楽の感情的性格との相互作用について検討した。

第1章では、音楽の感情的性格と気分に関する研究について概観し、悲しい時に悲しい音楽を聴くという行動を中心に、音楽の感情的性格と気分の関係についての問題を提起した。特に生活上必ずしも必要とは思われない音楽を、人はなぜ好み、なぜ聴くのだろうか。人が音楽を聴く理由は幾つか考えられるが、その一つに気分変化という点があげられる。気分に影響を及ぼす音楽の要因としては、テンポ、音の高さなどの音楽的側面が考えられるが、気分と最も結びつきやすいと考えられる要因として、音楽の感情的性格があげられる。音楽の感情的性格は、感情価で示される。感情価とは、聴取者がどのようにその音楽を認知したかという評定値であり、音楽作品に対する反応とは区別すべきものと考えられている。ところで、音楽を聴取者が自ら選択する場面が考えられるが、その選択の際にも気分が影響する。ただし、その影響は一律ではなく、生じている気分とは反対の性質の音楽を好む場合と、同じ性質の音楽を好む場合がある。また、人は、外的な刺激に能動的に働きかけて気分を調整すると考える Mood Management Theory に従い、気分調整のために能動的に音楽聴取を行うことがあると考えられている。人が悲しい時に悲しい音楽を聴くという行動は、音楽聴取により悲しみをより強められると思われるため、Mood Management Theory に矛盾する行動と一見考えられる。しかし、悲しい音楽は経験的にも好まれて聴かれることがあり、何らかのポジティブな効果がみられると予想された。

第2章では、大学生を対象に、悲しい時に聴く音楽の性質を調べた質問紙調査や、聴取前の悲しみの強さと音楽の感情的性格による悲しい気分への影響を調べた2つの実験について述べた。調査の結果、悲しみが強いほど、暗い音楽を聴く傾向が示された。したがって、悲しみが強い時に悲しい音楽を聴くと悲しみは低下するが、悲しみが弱い時に悲しい音楽を聴くと悲しみが高まる、または変化しないことが予測された。次に、実験1及び実験2の結果、音楽聴取前の悲しみの強さに関わらず、音楽聴取後の悲しい気分は、聴いた音楽によってほぼ一定の強さに収束した。結果的に、非常に悲しい時に悲しい音楽を聴いた場合、音楽聴取後の悲しい気分は低下するが、やや悲しい時に悲しい音楽を聴いた場合には、音楽聴取後の気分は変化しないことが示唆された。つまり、悲しい音楽は、悲しみが弱い時には効果を示さないが、非常に悲しい気分の時に聴くと悲しみを和らげる効果があり、気分にも有効に働くことが推察された。

ところで、一般的に人は快適な気分の時には、悲しい音楽は聴かないという傾向がみられる。第3章では、大学生を対象に、快適な気分における悲しい音楽及び明るい音楽の聴取による気分への影響を調べた実験について述べた。実験の結果、快適さは、主に明るい音楽を聴くと聴取後に高まり、悲しい音楽を聴くと聴取後に低下した。抑鬱は、非常に快適な時に悲しい音楽を聴く条件のみ、聴取後に高まった。これらの結果より、聴取後の快適さは、聴いた音楽の感情的性格によって加算的または減算的に、収束的に変化する傾向がみられた。さらに、悲しい音楽は、非常に快適な気分に対してネガティブな

影響を及ぼすことが示唆された。また、聴取音楽の感情的性格による影響は、第2章の実験で示された悲しい気分やニュートラルな気分の場合よりも、快適な気分の場合の方がより小さいことが推察された。

さらに、第4章では、大学生を対象とし、音楽聴取前の気分が聴取音楽の感情的性格の評定にどのように影響するかを調べた実験について報告した。すべての実験において、悲しい気分または楽しい気分、ニュートラルな気分の状態で被験者に音楽を聴かせ、聴取音楽の感情的性格を評定させた。実験1では、悲しい音楽または明るい音楽について、実験2では、強くて荘重な感情的性格または親和的で荘重な感情的性格のいずれかの特徴をもった音楽について、実験3では、曖昧な感情価をもつ音楽について、それぞれ調べた。その結果、音楽聴取前の気分は、音楽の感情的性格の主観的な評定に影響するが、その影響は音楽によって一様ではないことが示された。また、音楽の感情的性格の評定における聴取前の気分の影響は、曖昧な感情価を持つ音楽においてより強い傾向があった。すなわち、悲しい気分の時には音楽をより抑鬱的に評価し、楽しい気分の時にはより落ち着いた音楽として評価した。

第5章では、本論文で報告した研究の結論を総括し、研究の問題点及び今後の課題を述べた。気分と音楽の感情的性格は、相互に影響を及ぼすことが研究結果より示された。気分は聴取音楽の選択に影響し、音楽の感情的性格の評定にも影響を及ぼした。反対に、音楽の感情的性格は聴取後の気分に影響した。また、人は気分調整のために状況に応じて効果的な音楽を選んで聴いていることが、気分変化という点において実証された。悲しい時に悲しい音楽を聴くといった日常的な音楽聴取行動も、Mood Management Theory に一致した行動とすることができる。

論文審査の結果の要旨

音楽は現代人の日常生活の一部となっている。音楽を耳にしない日は1日とてないといってよい。しかしながら、音楽を演奏することにより生活の糧を手にする職業的音楽家ならぬ一般人にしてみれば、音楽を聴取することが直ちに生存上の利益をもたらすとは思われない。音楽は謎に満ちた存在である。

音楽の存在意義の一つとして、気分の調整効果が示唆されている。音楽を聴くことにより、ふさいだ気分や不快な気分を低減することができるというのである。しかし、音楽の中には暗く沈んだものや攻撃的なものもあり、人はあえてそれらを選択して聴取することもある。音楽聴取が気分の改善のためであると単純に理解することはできないように思われる。

本論文は、こういった逆説的な音楽の存在意義を、聴取前の気分と音楽の感情的性格との相互作用を実験的に分析することを通じて、実証的に明らかにしようと試みたものである。

論文は5章から構成され、第1章は問題提起、2章から4章までが実験と調査、5章が総括と展望に当てられている。

第1章で論者は、音楽聴取の意義に関する諸説を取り上げ、解説している。聴取前の気分との関連では、現在の覚醒レベルと同じ性質の音楽を聴くのだという同質性仮説と、現在の覚醒レベルを適切な強さに調整するという対処療法仮説が対立し、錯綜している。音楽療法においては、初期には前者に基づいて気分にあった音楽を聴かせ、徐々に目標となる気分を生じさせる性格を持った音楽に変えていくことが有効だとされている。現時点では、一方に軍配を揚げることはできない。論者はひとまず、人は快楽を求めるという原理に従って音楽を聴取し、気分を調整するのだという Mood Management Theory に従い、悲しい気分の時にあえて悲しい音楽を聴くという行動を取り上げ、この奇妙な行動の意義を実証しようとする。

第2章では、まず、大学生を対象に、気分と聴取する音楽の性質の関係を質問紙により調査した。その結果、確かに悲しい気分と悲しい音楽の聴取が関連していることが示された。そこで論者は、2実験をおこない、異なった強さの悲しみを誘導した後に大学生に数種の異なる感情的性格を持つ音楽を聴かせ、悲しみの強さを聴取前後で比較した。音楽の感情的性格とは、リズムや調といった物理的な特徴ではなく、主観的に評定される認知的な性質である。実験の結果、音楽聴取後の気分は、聴取前の気分に関わらず、聴取した音楽の感情的性格に従い一定の値に収束した。したがって、明るい感情的性格を持つ音楽は常に悲しみの気分を和らげる効果を持ったが、悲しい感情的性格を持つ音楽も、聴取前の悲しみの気分が著しく強い場合には、聴取後に悲しい気分が和らげる効果を持つことが明らかにされた。すなわち、悲しい気分の時に悲しい音楽を聴くことは、気分調整に有効に作用する場合があったのである。

逆に人は、快適な気分の時にあえて悲しい音楽を聴くことは少ない。第3章では、快適な気分を実験的に誘導し、種々の

感情的性格を持つ音楽が、気分をどのように変化させるかが1実験により調べられた。その結果、この場合には音楽の感情的性格は、生じている聴取前の気分に対し比較的単純に加算的あるいは減算的に作用し、悲しい感情的性格を持つ音楽は、快適さを低下させ、抑鬱気分を誘導することが示された。

第4章では、気分により音楽の感情的性格の認知が変化するか、その変化は常に事前の気分一致した方向に生じるのかという2点が、多様な音楽を用いて、3実験により分析された。その結果、感情的性格が不明確な音楽についてはそのような影響が認められた。絵画については全般に渡りそのような影響が生じることがすでに知られている。このような差違が芸術の性質の違いによるものか、あるいは視覚と聴覚の違いによるものか、等についてはさらに検討が必要である。

第5章では実験結果がまとめられた後、本研究のいくつかの問題点とともに、将来への展望が述べられている。第1に、本研究では一貫して音楽聴取前後の主観的気分変化が問題とされているが、心拍、脈拍などの生理的指標や瞬目などの無意識的行動を音楽聴取中に測定することにより、客観的な活動の変化を捉えるとともに、気分変化のダイナミズムを明らかにすることも可能であろうという。第2に、本研究では、気分が楽しい—悲しいの1軸を構成する量的次元として扱われているが、実際には悲しみ一つをとっても種々の質的変異があり、時にはポジティブな気分として捉えられることもある。悲しみの質的内容に踏み込んだより詳細な検討が必要であろうという。

音楽には極めて多様なものがあり、同時に人の気分も場面により人格により多種多様である。もとよりこれらの関係をすべて明らかにするような作業は一人の研究者の力をはるかに超えている。論者の研究成果はこの大きな標的に比べれば小さな一石に過ぎないかもしれないが、衣食住のように人の生存に不可欠なものではない、と見なされがちな音楽が、気分調整の面で重要な役割を果たしていることを実験的に明らかにしたことは高く評価すべきであろう。とりわけ、逆説的とも言える悲しい音楽の存在意義の一端を、巧みな実験から導出したことは、本研究の重要な成果だといえる。聴取時の気分と音楽選択、音楽の効果、感情的性格の認知、これらの間の相互関係を組織的に分析した研究は、これまでにない新しいタイプの研究であり、論者の独創的な視点である。研究手法の面でも、実験と質問紙をうまく組み合わせた手法は論者独自の世界を構成するものであり、評価に値する。さらに、あえてリズムや調などの音楽の客観的指標ではなく感情的性格という主観的評定と主観的気分との関係を分析した点も独特な視点といえる。被験者の気分誘導という難しい実験操作を着実にこなし、数百人にも上る被験者のデータをまとめ上げる力量とねばり強さも特筆に値する。

もちろん問題点や不十分な点も散見される。第1に、同じように気分調整効果を持つことが想定され、直接的に人の生存と関わりを持たない芸術には絵画、文芸、映画、演劇その他多様なものがあるが、それらとの直接的な比較は音楽の独自性を考える上で何よりも重要であり、今後の検討が必須であろう。また、気分のより微妙な質的差違に加えて、明るい—悲しいといった1軸では表せない音楽の性格の質的な差違をも考慮に入れた精密な検討も必要であろう。実験資料の因子分析については、因子選択の基準が少し甘いのではないかという批判も出された。また、本研究のような手法で誘導可能な気分には限界があり、音楽を聴く気にもなれないと言うようなより極端な気分には、この実験結果が当てはまらないのではないかという意見も出された。しかし、これらの難点を考慮に入れても、なおかつ本論文の独自性は評価に値するものであり、上記問題点は、今後の着実な研究により解消されることを期待すべきであろう。

以上審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。2002年2月8日、調査委員3名が本論文とそれに関連したことがらについて口頭試問をおこなった結果、合格と認めた。